

《阿弥陀經》における「七重行樹」について

畝 部 俊 英

はじめに

《阿弥陀經》には、極樂世界の依報莊嚴が説かれているなかに、次のような一文がある。鳩摩羅什訳（四〇二年訳出）『阿弥陀經』（以下『阿弥陀經』という）によれば、

又舍利弗、極樂国土、七重欄楯、七重羅網、七重行樹、皆是四宝、周匝圍繞。是故彼国、名曰極樂。^①

（また、舍利弗、極樂国土には、七重の欄楯、七重の羅網、七重の行樹あり、みなこれ四宝、周匝し圍繞せり。このゆえにかの国を、名づけて極樂という。）

とあり、この箇所に対応する梵文『阿弥陀經』（*The Smaller Sukhāvatīyūha*）の文は、次のようである。

punar aparāṃ Śāriputra Sukhāvatī lokadhātun̄ saptaḥhir vedikābhīṇ̄ saptaḥhis tālapanktibhīṇ̄ kaṅkaṇjālāis̄ ca
samanāṃkṛtā samantato ' nuparikṣiptā citrā darśanyā caturṇām | tad yathā suvarṇasya rūpyasya vaidūryasya

sphaṭikasya | evaṃrūpaṃ śāripuṭra buddhākṣetragnayūhāṃ samalanṅkṛtaṃ tad buddhākṣetram || ⁽²⁾

(また、次に、シャーリプトラよ、極楽世界は、七〔重〕の欄楯 (vedikabhīṇ)、七〔重〕のターラ樹の並木、鈴のついたもろもろの網によって飾られ、ぐるっと (samantato ⁽³⁾) 囲まれ、きらびやかで、美しい。「それから七〔重〕の欄楯などは」四つの宝石、すなわち金・銀・瑠璃・水晶からできている。シャーリプトラよ、かの仏国土は、このような、仏国土のもろもろの功德の莊嚴によって、飾られているのである。)

極楽世界は、七重の欄楯 (サンチーの第一ストウーパのように、インド式の仏塔の周囲を囲んでいる石垣 (vedikā) のようなもの)、七重の羅網 (鈴のついた網。梵文では「七〔重〕」とはなっていない)、そして七重の行樹 (ターラ樹の並木) によってぐるっと囲まれているとあるが、中国や日本における『阿弥陀經』に関する經疏や講録などは、漢訳の『無量壽經』や『無量壽經優婆提舍願生偈』(以下『淨土論』という) の所説にもとづいて、極楽国土は欄楯などによって囲まれ、限定されている世界ではないとする。そこで、ここに掲げた『阿弥陀經』の文についても、いろいろな解釈が試みられている。漢訳の經・論と中国の經疏や日本の講録の解釈を見ていくことによって、極楽世界はいかにイメージされてきたのか、また、徳川時代、東・西本願寺の学匠による『阿弥陀經』の講録の「科文」では、この文を「宝樹莊嚴」と呼んでいるが、「七重欄楯、七重羅網、七重行樹」とあるのに、「七重行樹」を「宝樹」として、何故「宝樹莊嚴」だけに取りきるのであろうか、本稿ではこれらの点について取り上げてみたい。

まず、中国の經疏や日本の講録が『阿弥陀經』に説かれている極楽世界を解釈するについて、用いた經・論を

見てゆこう。

一、經・論

(一) 仏陀跋陀羅・宝雲共訳(四二二年訳出) ⁽⁴⁾『無量寿經』卷上(『大正藏』一二卷、二七〇頁、上段)

其仏国土、…、恢廓眩蕩、不可限極。

(その仏国土は、…、恢廓眩蕩として、限極すべからず。)

『無量寿經』によれば、極楽国土は限極することのできない世界であるとする。この『無量寿經』の文は、後で取り上げる『浄土論』の「観彼世界相 勝過三界道 究竟如虚空 广大無辺際」の文と共に、中国の経疏や日本の講録において、極楽国土は欄楯・羅網・行樹によって囲まれた、有限の世界ではないとする証文として挙げられ、極楽世界の重要なイメージとなっているのであるが、梵文『無量寿經』にはこの箇所に対応する文はなく、次のような文がある。

(二) 梵文『無量寿經』(*The Larger Sūkhāvatīyūha*) 第十六章 (Ashikaga 本 ⁽⁵⁾, p. 32, ll. 22-24.)

evanrūpāir ānanda saptaratnamayair vṛkṣaiḥ samītatam tad buddhākṣetrām samantāc ca kadalīstambhaiḥ s
aparatnamayai ratnatālapanktibhiḥ cānuparikṣiptam....

(アーナンダよ、かの仏国土は、このような七つの宝石でできている木々に覆われ、また、七つの宝石ででき

『阿弥陀經』における「七重行樹」について

ている芭蕉の幹と、宝石のターラ樹の並木とによって、ぐるっと (samtat) 囲まれている。…)

この文は梵文とチベット語訳^⑤とに見られ、漢訳五本^⑥の〈無量寿経〉諸異本には対応する箇所はないので、成立の遅い部分に属するのであろうが、極楽世界は芭蕉の幹とターラ樹の並木とによって、囲まれているとある。これに対し、漢訳『無量寿経』の「恢廓眩蕩、不可限極」は漢訳五本のうちの、「初期無量寿経」と呼ばれている『阿弥陀三耶三仏薩樓仏檀過度人道経』^⑦と『無量清浄平等覚経』^⑧の「眩蕩甚大無極」を承けているのであろうが、いずれにしても、漢訳『無量寿経』と梵文『無量寿経』とはまったく違う表現である。

(三) 量良耶舎訳(四二四—四四二年の間の訳出^⑨)『観無量寿経』(以下『観経』という。『大正藏』一二卷、三四二頁、中段)

次観宝樹。観宝樹者、一一觀之、作七重行樹想。一一樹高、八千由旬。其諸宝樹、七宝華葉、無不具足。妙真珠網、弥覆樹上。一一樹上、有七重網。…是為樹想。名第四觀。

(次に宝樹を觀ぜよ。宝樹を觀ずとは、一々にこれを觀じて、七重行樹の想をなせ。一々の樹の高さ、八千由旬なり。そのもろもろの宝樹、七宝の華・葉、具足せざることなし。…妙なる真珠の網、樹の上に弥覆し、一々の樹の上に七重の網あり。…。これを「樹想」とし、「第四觀」と名づく。)

『観経』には、定善—三觀のなかで、極楽を觀想する第四觀として「宝樹觀」が説かれている。「宝樹觀」では、極楽国土の宝樹を觀想するのであるが、その宝樹を觀想するについて「一々にこれを觀じて、七重行樹の想をなせ」とある。そこで、この宝樹と七重行樹とは同じものであり、それはまた『阿弥陀経』の「七重行樹」と同じ

ものと、中国の経疏や日本の講録では理解された。宝樹の高さは八千由旬であり、その宝樹の上には妙なる真珠の網が弥覆し、さらに一つ一つの宝樹は七重（七段）になっていて、その七重の間にはそれぞれ網があるという。したがって、羅網は宝樹を上から覆い、また七重に莊嚴しているものとされた。そして、『阿弥陀経』の「七重行樹」を「宝樹」と呼ぶのは、この『観経』・「宝樹觀」にもとづくのであり、「七重羅網」が「七重行樹」を覆い、莊嚴しているとするのも、この「宝樹觀」によるのである。

（四）菩提流支訳（五二九または五三一年訳出）¹¹『浄土論』（『大正蔵』二六卷、二三〇頁、下段—二三一頁、上段）

觀彼世界相 勝過三界道 究竟如虚空 广大無邊際 …………… 宮殿諸樓閣 觀十方無碍 雜樹異光色
宝欄遍圍繞 無量宝交絡 羅網遍虚空 種種鈴鈴響 宣吐妙法音 ……………

（かの世界の相を觀するに、三界の道に勝過せり。究竟して虚空のごとく、广大にして辺際なし。……………

宮殿、もろもろの樓閣にして、十方を觀ること無碍なり。雜樹に異の光色あり、宝欄遍く圍繞せり。無量の宝交絡して、羅網虚空に遍ぜん。種々の鈴、響きを発して、妙法の音を宣べ吐かん。……………）

天親（世親）の造であるが、梵文はなく、菩提流支の漢訳だけが伝えられている『浄土論』は偈文と長行（散文）とよりなり、前述のように、前半の偈文のなかに「觀彼世界相 勝過三界道 究竟如虚空 广大無邊際」とあり、安樂国は广大無邊際の世界であり、それがいわゆる三嚴二九種の功德莊嚴によって飾られている。長行の解義分によれば¹²、その「三嚴」の第一は「仏国土莊嚴功德」であるが、一七種に分けられ、そのなかで「究竟

如虚空 广大无边際」は「莊嚴量功德成就」、「宮殿諸樓閣 觀十方無碍 雜樹異光色 宝欄遍圍繞」は「莊嚴地功德成就」、「無量宝交絡 羅網遍虚空 種種鈴發響 宣吐妙法音」は「莊嚴虚空功德成就」とされている。安樂国は量が广大无边際の世界であり、地上には「十方を觀ること無碍」の宮殿・樓閣があり、雜樹は宝欄によって遍く圍繞され、虚空には羅網が遍く懸かり、その羅網の鈴の音は響き渡り、妙なる法音を宣吐しているという。ここで注目されるのは、雜樹が宝樹によって圍繞されているとあることである。中国の經疏や日本の講録によれば、この「雜樹」は『觀經』や『阿弥陀經』における「宝樹」または「七重行樹」のことであり、「宝欄」も『阿弥陀經』における「七重欄楯」のことと解釈され、その宝樹または行樹が欄楯によって圍繞されているとするのである。そこで、欄楯と羅網によって飾られた宝樹ということになる。したがって、後で取り上げるように、『阿弥陀經』における「七重欄楯、七重羅網、七重行樹」について、日本の講録の訓読では「七重ノ欄楯、七重ノ羅網アル七重ノ行樹アリ」とか「七重欄楯シ。七重ノ羅網セル。七重ノ行樹アリ」するものもある。しかも、その世界は無辺際であるから、このような宝樹は極樂を囲んでいるのではない。それについては『阿弥陀經』の異訳である『称讚浄土仏撰受經』（以下『称讚浄土經』という）の当該箇所にある「处处皆有」という語句が用いられる。

(五) 玄奘訳（六五〇年訳出）『称讚浄土經』（『大正藏』一二卷、三四八頁、下段）

又舍利子、極樂世界浄仏土中、处处皆有七重行列妙宝欄楯七重行列宝多羅樹。及有七重妙宝羅網周匝圍繞。

四宝莊嚴。金宝・銀宝・吠琉璃宝・頗胝迦宝、妙飾間綺。舍利子、彼仏土中有如是等衆妙綺飾功德莊嚴、甚

可愛樂。是故名爲極樂世界。

（また、舍利子、極樂世界淨仏土のなかには、処々にみな七重に行列せる妙宝欄楯、七重に行列せる宝多羅樹あり。および七重の妙宝羅網ありて、周匝し圍繞せり。四宝もつて莊嚴せり。金宝・銀宝・吠琉璃宝・頗胝迦宝にして、妙飾間綺せり。舍利子、かの仏土のなかにはかくのごときらの衆妙綺飾の功德莊嚴ありて、はなはだ愛樂すべし。このゆえに名づけて極樂世界となす。）

この『称讃淨土經』の文によれば、「七重に行列せる妙宝欄楯」、「七重に行列せる宝多羅樹」そして「七重の妙宝羅網」は「極樂世界淨仏土のなかには、処々に」あつて、「周匝し圍繞」しているとする。『称讃淨土經』には、「処処」という語が他の箇所にもしばしば用いられているが、梵文と対照してみると相応する語がないことは、別の拙論で述べておいた¹³⁾。ともあれ、以上の經・論によれば、廣大無辺際極樂世界のなかには、処々に欄楯に囲まれ、羅網で覆われた宝樹・宝林（『称讃淨土經』には「七重に行列せる宝多羅樹」とあるから、これは宝樹というより、宝林である）があるのである。『称讃淨土經』が玄奘の名によって訳された唐代（六五〇年）以後、このような極樂のイメージが定着していくのである。

二、中国の經疏

中国や日本においては、『阿弥陀經』の注釈書は枚挙に暇がないほどあるが、宝樹（七重行樹）について述べて『阿弥陀經』における「七重行樹」について

いるものを取り上げて見ていくこととする。ただし、先に經・論の(三)において取り上げた『觀經』・「宝樹觀」について、善導が『觀無量寿仏經疏』(以下『觀經疏』という)において、次のように指摘しているので、まずそれを見ておきたい。

(一) 善導(六一三―六八二)『觀經疏』卷第三・「定善義」(『大正藏』三七卷、二六四頁、上段)

二言觀宝樹者、…。此明弥陀淨国広闊無辺。宝樹・宝林豈以七行為量也。

(二に「宝樹を觀ず」というは、…。これ弥陀の淨国は広闊無辺なることを明かす。宝樹・宝林、あに七行をもつて量とせんや。)

『無量寿經』の「恢廓眇蕩、不可限極」とか『淨土論』の「究竟如虚空 廣大無辺際」とあるのにもとづいて、善導は「弥陀の淨国は広闊無辺」と述べ、「宝樹・宝林、あに七行をもつて量とせんや」と言っているのであるが、このことについて、徳川時代、真宗大谷派の学匠である深励は『阿弥陀經講義』において、次のように指摘している。

七重行樹とは定善義^{十二右}に觀經の宝樹觀の文の七重行樹を釈して。善導已前の古師の中に此七重行樹と云ふを極樂のぐるりを取り回して七重の並木あることじやと解して書いてあるとみえる。善導夫を初めに破して弥陀の淨土は廣大無辺際^{十三}の淨土。豈ただ一の七重の行樹のみならんや。極樂には所所に宝樹の林あり。夫を七重の行樹と説いた者じやとあり。⁽¹⁵⁾

深励は「善導已前の古師の中に」と述べて、名前は出していないのであるが、その古師のなかには「此七重行

樹と云ふを極樂のぐるりを取り回して七重の並木あることじやと解して書い」た人もあつたと見て、善導はそれを破すために、「此明弥陀淨国広闊無辺。宝樹・宝林豈以七行為量也」と言つたと解説するのである。『阿弥陀經』の「極樂国土、七重欄楯、七重羅網、七重行樹、皆是…、周匝围绕」の文だけによれば、古師の解釈も当然ありうるものと思われる。

次に、唐末宋初の頃（九六〇年頃）、後人の偽撰と見られている¹⁶ 窺基『阿弥陀經通贊疏』（以下『通贊疏』という）を見てみよう。

（二）窺基（？）『通贊疏』卷中（『大正藏』三七卷、三三八頁、下段—三三九頁、上段）

極樂国土七重欄楯者宝樹周匝有七重欄楯也。…周匝者古申多解。一云欄楯围绕宝樹故、云围绕。二云欄楯羅網行樹围绕国土処莊嚴故。

（「極樂国土、七重欄楯」とは宝樹の周圍に七重欄楯あるなり。…「周匝（围绕）」とは古くより多解を申す。一つに云う、欄楯宝樹を围绕するがゆえに、「围绕」と云うと。二つに云う、欄楯・羅網・行樹、国土の処々の莊嚴を围绕するがゆえにと。）

「周匝围绕」については、いろいろな解釈があつたようである。ここでは二説を挙げている。一つは、欄楯が宝樹を围绕するとする解釈であり、『通贊疏』もこの解釈を取っている。二つは、欄楯・羅網・行樹が極樂国土の処々の莊嚴を围绕するとする解釈であり、これは『称讚淨土經』の「極樂世界淨仏土中、処処…」とあるのを取り入れた解釈のようである。

(三) 元照 (一〇四八—一一一六) 『阿弥陀経義疏』、『大正藏』三七卷、三五九頁、下段)

其樹枝葉上下七層、皆垂珠網。狀同仏塔。…一重樹下一重欄楯、…

(その樹の枝葉は上下七層にして、みな珠網を垂れる。状は仏塔に同じ。…一重の樹下に一重の欄楯、…)

「七重行樹」について『観経』・「宝樹觀」の所説にもとづき、その樹は上下七層であり、各層に珠網が垂れている。また各層に欄楯がある。したがって、その状(かたち)は仏塔と同じであるという。この仏塔というのは、インドのサーンチーの仏塔のようなものではなく、各階に欄干のある七重の塔のことであろう。

ところで、この「狀同仏塔」という「七重行樹」のイメージは、日本においては浄土宗に取り入れられることになる。

三、日本の講録

(二) 聖聰 (一二三六—一四四〇) 『小経直談要註記』巻第五『浄土宗全書』一三、三五六頁、下段)

謂、於一樹上、七処置於欄楯羅網故、云七重。狀如仏塔歟。行樹七重者根茎枝条葉華菓也。

(謂く、一樹の上において、七処に欄楯・羅網を置くゆえに、七重という。状仏塔のごとくなるか。行樹七重とは、根・茎・枝・条・葉・華・菓なり。)

一本の樹の上に七処に欄楯と羅網があるから、「七重」というとあるのは、これも『観経』にもとづく解釈であ

る。それは「状如仏塔敷」と、元照の説を承けつつ、明瞭には言い切っていない。

(二) 義山(一六四八—一七一七)『阿弥陀経随聞講録』(『浄土宗全書』一四、二〇頁)

当麻变相有如斯樹。是從上至下。七通為牆、非七邊也。此欄楯羅網能莊嚴故、七重欄楯七重羅網アルト点スベシ。

(当麻の变相にこのごときの樹あり。これ上より下に至る、七通りに牆をする。七邊りにはあらざるなり。この欄楯と羅網とは能莊嚴なるがゆえに、「七重ノ欄楯七重ノ羅網アル」と点すべし。)

当麻寺に伝わる変相は『観経』によって極楽世界があらわされている。したがって、そこに見られる宝樹も『観経』・「宝樹觀」によって描かれている。上に引用した「宝樹觀」の省略した箇所によれば、「(一一樹上、有七重網。)(一一網間、有五百億妙華宮殿、如梵王宮。諸天童子、自然在中。一一童子、有五百億釈迦毘楞伽摩尼宝、以為瓔珞。其摩尼光、照百由旬。猶如和合百億日月。不可具名。)(一々の樹の上に七重の網あり。一々の網の間に、五百億の妙華の宮殿ありて、梵王宮のごとし。もろもろの天童子、自然になかにあり。一々の童子、五百億の釈迦毘楞伽摩尼宝ありて、もって瓔珞とす。その摩尼の光、百由旬を照らす。なお百億の日・月を和合せるがごとし。つぶさに名づくべからず。)(とあるが、それが描かれているのである。『阿弥陀経』の「七重行樹」も、この『観経』・「宝樹觀」の「七重行樹」と同じ宝樹であるとされているから、「七重欄楯、七重羅網、七重行樹」は「七重ノ欄楯、七重ノ羅網アル七重ノ行樹アリ」と読むようにと言うのである。この読み方は、現代にいたるまで守られていて、たとえば、坪井俊映『浄土三部経概説』所収の大雲点による『阿弥陀経』漢文書き下しにも

踏襲されている¹⁸⁾。次に真宗の講録を見てみよう。

(三) 深励(二七四〇—一八一七)『仏説阿弥陀經講義』卷五『仏教大系』『浄土三部經』第五、一八五頁。『浄土三部經講義』3『阿弥陀經講義』、一四七頁。文化二年(一八〇五)の講録)

七重(七宝)とあるが、「七重」とする) 羅網とは觀經に一一樹上有七重網(「有七宝羅」とあるが、「七重網」とする)等とあり。一一の宝樹の上に虚空から宝のあみがかりてあるのなり。されば七重(七宝)とあるが、「七重」とする)の欄も別楯に離れた欄楯にあらず。是は宝樹の下に籬をしたる如く高欄で取りまいてあるなり。菊や牡丹の花壇の回りに籬をいい空より鳥の来ぬ様に網をかける。夫が皆花壇のかざりになる。今も其如く羅網は宝樹の上になる莊嚴。欄楯は宝樹の本にある莊嚴故に。此一段を宝樹莊嚴を讚すると云ふ一科を立てるなり。

本稿の「はじめに」において「徳川時代、東・西本願寺の学匠による『阿弥陀經』の講録の「科文」では、この文を「宝樹莊嚴」と呼んでいるが、「七重欄楯、七重羅網、七重行樹」とあるのに、「七重行樹」を「宝樹」として、何故「宝樹莊嚴」だけに取りきるのであろうか」という疑問を提示しておいた。深励は「菊や牡丹の花壇の回りに籬をいい空より鳥の来ぬ様に網をかける。夫が皆花壇のかざりになる」という譬えを出して、「今も其如く羅網は宝樹の上になる莊嚴。欄楯は宝樹の本にある莊嚴故に。此一段を宝樹莊嚴を讚すると云ふ一科を立てるなり」と、その理由を述べている。

(四) 履善(二七五四—一八一九)『仏説阿弥陀經紀聞』卷上『真宗全書』第五卷、七七頁、文化一三年(一八一

六の講録

行樹ト云フハ。ナミキノコトナリ。…七重欄楯七重羅網ハ行樹ニソフタ伴ナリ。ソノココロナレバ。七重欄楯シ。七重ノ羅網セル。七重ノ行樹アリト読ムベキナリ。七重ノナミ木アリテ。七重ノヤライヨ結び。其空ニハ七重ノアミヲ覆テアルト云フコトナリ。…周匝圍繞ト云フハ。宮殿ノ四方ヲトリマキメグル相ナリ。『七重欄楯七重羅網ハ行樹ニソウタ伴ナリ』という言い方で、『七重ノナミ木』、すなわち一本一本が七段よりなっている宝樹の並木があつて、『七重ノヤライ』で囲まれ、並木の上の空は『七重ノアミ』で覆われているのである。したがって、『阿弥陀経』においては、『七重欄楯シ。七重ノ羅網セル。七重ノ行樹アリト読ムベキナリ』とある。また、『周匝圍繞』とは、『宮殿ノ四方ヲトリマキメグル相』であつて、極楽国土の四方を取りまき繞っているのではないとするのである。

ところで、近代化のはじまる明治時代に入り、日本における〈阿弥陀経〉研究は、新しい局面を迎えることになった。日本に伝承されてきた悉曇『阿弥陀経』が梵文『阿弥陀経』として校訂され、イギリスの『王立アジア協会誌』(JRAS)に発表されたのである¹⁹⁾。時に明治十三年(一八八〇)のことであつた。そして、三年後の明治十六年(一八八三)には、アーリアン・シリーズの一冊として梵文『無量寿経』が出版されるが、付録として梵文『阿弥陀経』も再録されている²⁰⁾。ここに至つて梵文による〈阿弥陀経〉研究が始まるのである。また、明治以後、インドへの渡航も可能となり、特に第二次世界大戦後はフィールド・ワークの重要性が強調されるようになり、仏教遺跡の実地調査も行われるようになった。極楽の依報莊嚴はインドの霊場や仏塔をモデルとするもの

であることも分かってきた。

四、現代の論考

(一) 中村 元「極樂浄土の観念―そのインド的解明とチベットの・日本の変容」『印度学仏教学研究』第一卷第二号、一九六三年、一三一頁。同「阿弥陀経チベット訳について」(『岩井博士古稀記念論文集』、一九六三年、四二二頁。中村元選集「決定版」第二一卷『大乘仏教の思想』、一九九五年、七二二―七二三頁。本稿は「決定版」参照)

次に極樂浄土の光景に移っていこう。まず極樂には「七重の欄楯」(Skt. *saptadhir vedikāḥ* Tib. *kha khyer rin pa bdun*) があるという。羅什訳には『七重欄楯』、玄奘訳にはもつとはつきりと『七重行列妙宝欄楯』となっているから、これらを参照すると、かなりはつきりする。たとえば現存のサーンチー第一ストウーパは現存するものとしては最も完全なものであつて、その欄楯は一重であるが、それが七重になっていて、七回も右繞三匝のできることを理想として考えていたのではなからうか。…

〔極樂浄土には七重の欄楯があると』阿弥陀経』に述べられているが、ほぼそれに近いものを、わたくしは南インドのアンドラプラデーシュ州のナーガールジュナコンダで見たことがある。そこには水力発電のための貯水池がつくられ、遺蹟は水没してしまった。…〕

また極樂浄土には七重のターラ樹の並木の列があるという (saptarabis talapakṭibhiḥ)。訳文は一層はつきりしている。チベット訳には *sin ta lahī phren ba rim pa bdun* となっている。漢訳には『七重行樹』(羅什)、『七重行列宝多羅樹』(玄奘)となっている。インドでは霊場の境内の参詣道の両側に並木の列をつくる習わしがあり、今日なおヒンドゥー、イスラーム両教徒を通じて認められるから、かなり古い時代にまで遡りうるものであろう。その並木は直線的で、左右均斉であり、日本のように不均斉を尊ぶ観念がない。ストウーパ(または祀堂)へ参詣する道の並木の列が七重であるというのであろう。…

「極樂は霊場の投影されたもの」とされる中村博士は⁽²⁾、サーンチーの第一ストウーパを例に挙げ、その欄楯と極樂の欄楯とを共通のものと見、また今は水没してしまったナーガールジュナコンダ遺蹟において、七重の欄楯に「ほぼ近いもの」を見たことがあると追記している。

(二) 平川彰「大乘仏教の成立」(『古代史講座』第一二巻、一九六五年、七〇―七二頁。平川彰著作集第六卷『初期大乘と法華思想』、一九八九年、一八頁。本稿は著作集所収の「極樂浄土のモデルとしての仏塔」参照)

仏塔と極樂浄土との間に類似性のあることは、すでに中村元博士によって指摘せられているが、律蔵に説かれている仏塔の作り方と極樂とを比較してみれば、さらに明らかである。仏塔の作り方は、『四分律』『五分律』『僧祇律』『根本有部律雜事』等にみられるが、とくに『僧祇律』に詳しい。以下その特徴の二、三を示すこととしたい。

まず『阿弥陀經』によれば、極樂には七重の欄楯があるという。仏塔に欄楯のあることは、上記諸律の造

《阿弥陀經》における「七重行樹」について

塔法にも言っているが、実際にもサーンチーやバールフットなどの塔の欄楯によって確かめられる。サーンチーの大塔では、欄楯は遶道の内側と外側とにある。すなわち二重になっている。しかしもし遶道を幾重にもすれば、欄楯もふえるわけである。極樂には欄楯が七重になっているというが、そのような巨大な仏塔を考えて、説いたものであろう。

次に極樂には、七重のターラ樹の並木（七重行樹）があるという。仏塔にも並木がある。塔の左右に木を植えることは、『五分律』の造塔法に説いている。『僧祇律』にも、塔には菴婆羅樹・閼浮樹などの木を植えることを述べている。信者たちはかかる並木を通して、仏塔に進んだのである。極樂には七重の並木を想定しているのであり、大きな規模を考えている。

平川博士は律藏に述べられている造塔法と現存するサーンチーの仏塔などにもとづいて「浄土が何を機縁として説かれたかというに、これは仏塔をモデルにして説かれたものと考えられる」として、「極樂浄土のモデルとしての仏塔」ということを提起された。ただし、「阿弥陀仏は無量の寿命を持つ仏であるから、涅槃に入ることがない。阿弥陀仏のみならず、この浄土に生れた人びとも無量の寿命を持つとされるから、西方極樂には死ぬ人はないのである。したがって極樂には、仏の舍利（遺身）のあるはずはなく、したがって塔の建てられることもないのである」とあるように²² 極樂は仏塔をモデルとして説かれているが、それは欄楯や行樹などであり、極樂には仏塔そのものは存在しないのである。

日本の講録の（四）において見てきたように、履善は「周匝圍繞ト云フハ。宮殿ノ四方ヲトリマキメグル相

ナリ」と述べている。阿弥陀仏の住する宮殿が七重の欄楯や行樹によって周匝圍繞されているとあるが、本稿の最初のところで取り上げた梵文『阿弥陀經』の文によれば、「極樂世界は、七〔重〕の欄楯、七〔重〕のターラ樹の並木、鈴のついたもろの網によって飾られ、ぐるつと囲まれ」とあり、また梵文『無量壽經』の文にも、「かの仏国土は、… 七つの寶石できてゐる芭蕉の幹と、寶石のターラ樹の並木とによって、ぐるつと囲まれている」とあるところからすれば、仏塔にかわつて極樂世界そのものが七重の欄楯や七重の行樹によって圍繞されているのである。

おわりに

以上のように、中国や日本における『阿弥陀經』に関する経疏や講録などでは、漢訳の『無量壽經』に「其仏国土、… 恢廓眩蕩、不可限極」とあり、『浄土論』に「觀彼世界相 勝過三界道 究竟如虚空 廣大無辺際」とある所説などにもとづいて、極樂国土は欄楯や行樹などによって囲まれ、限定されている世界ではないとする。これに対して、梵文『阿弥陀經』と梵文『無量壽經』では、極樂世界は欄楯、ターラ樹の並木、鈴のついたもろの網、あるいは芭蕉の幹、ターラ樹の並木によって囲まれているとされている。漢訳經典と梵文經典のこの違いはいったいどうしてであろうか。筆者には、この疑問に答えることはできないが、マンダラについても同じような違いがあることが指摘されているので、それを紹介しておくこととする。

立川武蔵『曼荼羅の神々―仏教のイコノロジー』、一九八七年、一五二―一五三頁。

ところで、日本のマンダラとチベット・ネパールのそれとは形態上明らかな相違が見られる。チベットなどのマンダラは円輪によって囲まれているが、日本のマンダラは、通常、そのようになっていない。日本・中国と、インド・ネパールおよびチベットにおける世界についての理解の相違がそこには反映しているように思われる。

インド、隣接のネパール、さらにそれらの国の伝統をほとんどそのまま受け入れたチベットでは、マンダラとは「金剛環」(vajravali)に周囲をかこまれて、上部を「金剛籠」(vajrapañjara)によっておおわれて「金剛地」(vajrabhūmi)の上に建てられた「楼閣」(kutagara)を真上から―あるいは横から、つまり立体的に―描いたものである。

……

ところで、日本の胎藏・金剛界マンダラでは、チベットやネパールのマンダラにおけるように楼閣をまるく囲む金剛環などとは見あたらない。…中国人や日本人にとっては、世界を「閉じられたもの」―したがって、有限個の原理によって全構造を説明しうるもの―として表象することはそれほど意味あることではなかった。これは、インド・ネパール・チベットのマンダラは円輪（「金剛環」）に周囲をかこまれているのに対して、日本（中国も）のマンダラは、通常、そのようになっていないという形態上明らかな相違が見られることについて、「日本・中国と、インド・ネパールおよびチベットにおける世界についての理解の相違がそこには反映しているよ

うに思われる」という指摘である。本稿で見てきたように、このことは極楽世界にも当て嵌まるのではなからうか。いま、仮に、梵文『無量寿経』には対応箇所のない漢訳『無量寿経』の「其仏国土、…、恢廓眩蕩、不可限極」の文、そして『浄土論』の「観彼世界相 勝過三界道 究竟如虚空 广大无边際」の文を、インドの極楽国土観を表しているのではなく、中国の極楽国土観を反映しているものとするならば、中国や日本におけるマンダラに円輪（金剛環）がないことに対応するであろうし、梵文『無量寿経』の「かの仏国土は、…、また、七つの宝石でできてゐる芭蕉の幹と、宝石のターラ樹の並木とによって、ぐるっと囲まれている」の文、そして梵文『阿弥陀経』の「極楽世界は、…、七〔重〕の欄楯、七〔重〕のターラ樹の並木、鈴のついたもろもろの網によって飾られ、ぐるっと囲まれ」の文は、インド・ネパール・チベットのマンダラが円輪によって囲まれている、インドの世界観に対応しているのではなからうか。

註

- (1) 『大正新脩大藏経』（以下『大正藏』という）二二巻、三四六頁、下段。なお、この文については、拙論『阿弥陀経』における「七重欄楯・七重羅網・七重行樹」について」（『同朋仏教』第三八号、二〇〇二年、横組み一一二八頁）で取り上げた。本稿とは別のことを述べているが、論旨の展開上、引用文献も含めて重複するところがある。
- (2) *The Smaller Sukhāvatīyūha* (Emended text of F. Max Müller's edition by K. Fujita, 藤田宏達『阿弥陀経講究』東本願寺出版部、二〇〇一年) 横組み p. 80, 26.5-10.
- (3) 'samanātas' を「ぐるっと」と訳したことについては、上掲拙論の註（九二）（二〇五）。
- (4) 『無量寿経』を「仏陀跋陀羅・宝雲共訳（四二二年訳出）」とすることは、藤田宏達『原始浄土思想の研究』（岩波書店、

一九七〇年第一刷) 六九一七五頁。

- (5) *Sukhavatyaṃkha*, édité par A. Ashikaga (Librairie Hōzōkan, 1965 年、『足利惇氏著作集』第2巻、東海大学出版部、一九八七年、横組み一〇五一—一八二頁に再録)。梵文の補正は藤田宏達訳『梵文和訳無量寿經・阿弥陀經』(法藏館、一九七五年第一刷)所収の「附」梵文補正表」(横組み二〇一—四二頁)による。

- (6) 河口慧海「歳和对訳・無量寿經」(『浄土宗全書』一三三)梵蔵和英合璧浄土三部經」所収、山喜房仏書林、一九七二年再版、二七四頁。

- (7) 漢訳五本とは『阿弥陀三耶三仏薩樓仏檀過度人道經』二巻、『大正蔵』二二巻、三〇〇頁、上段—三一七頁、下段、『無量清浄平等覺經』四巻、『大正蔵』二二巻、二七九頁、中段—二九九頁、下段、『無量寿經』二巻、『大正蔵』二二巻、二六五頁、下段—二七九頁、上段)、『無量寿如来会』二巻、『大宝積經』巻一七・一八、『大正蔵』一一巻、九一頁、下段—一〇二頁、下段)、『大乘無量寿莊嚴經』三巻、『大正蔵』二二巻、三一八頁、上段—三二六頁、下段)である。

- (8) 『大正蔵』一一巻、三〇三頁、中段。

- (9) 『大正蔵』一一巻、二八三頁、上段。

- (10) 『觀無量寿經』の訳出者と訳出年については、藤田宏達『原始浄土思想の研究』一一六—一一七頁による。

- (11) 『浄土論』の訳出者と訳出年については、智昇撰『開元釈教録』巻六の「菩提留支」の項に「無量寿經論一卷」とあり、割註に「題云無量寿經優波提舍願生偈婆藪盤豆菩薩造。永安二年(五二九)於洛陽永寧寺出。僧弁筆受」(『大正蔵』五五巻、五四一頁、上段)とあり、円照撰『貞元新定釈教目錄』巻九の「菩提留支」の項にも「永安二年」(『大正蔵』五五巻、八三九頁、中段)とある。

しかし、費長房撰『歷代三寶紀』巻九には「菩提留支」の項に「無量寿優波提舍經論一卷」とあり、割註に「普太(宋)元、明の蔵経本では太は泰)元年(五三二)出」(『大正蔵』四九巻、八六頁、上段)とある。また道宣撰『大唐内典録』巻四の「菩提留支」の項にも、「無量寿優波提舍經論」とあり、割註に「普泰元年(五三二)」(『大正蔵』五五巻、二六九頁、中段)とある。

- (12) 『大正蔵』二六巻、一三二頁、中—下段。

- (13) 『称讃浄土經』の訳出者と訳出年については、『開元釈教録』巻八の「玄奘」の項に「称讃浄土仏撰受經一卷」として「永徽元年(六五〇)……訳」(『大正蔵』五五巻、五五五頁、下段)とある。訳出については、藤田宏達「玄奘訳『称讃浄土仏

撰受經』考」『印度哲学仏教学』一三号、一九九八年、一一三五頁 参照。

(14) 上掲拙論、一七二〇頁。

(15) 香月院深励『仏説阿弥陀經講義』『仏教大系』・「浄土三部經」第五所収、仏教大系刊行会、一九二九年、一八五―一八六頁。同『阿弥陀經講義』『香月院深励著作集』七、「浄土三部經講義」3、法藏館、一九八一年、一四八頁。

(16) 坪井俊映『改訂増補浄土三部經概説』(隆文館、一九七一年)五一〇頁。

(17) 『大正藏』一二卷、三四二頁、中段。

(18) 坪井、上掲書、五四七―五四八頁。

(19) F. Max Müller, "On Sanskrit Texts Discovered in Japan", JRAS, 1880, pp. 153-186.

(20) *Sukhāvatī-vyūha*, *Description of Sukhāvatī, the Land of Bliss*, ed. by F. Max Müller and B. Nanjio (Anecdota Oxoniensia, Aryan Series, Vol. 1, Part II), Oxford, 1883, pp. 92-100. (Appendix II. Sanskrit Text of the *Smaller Sukhāvatī-vyūha*).

(21) 中村元選集〔決定版〕第二一卷『大乘仏教の思想』(春秋社、一九九五年)七―四頁。

(22) 平川彰『極樂浄土のモデルとしての仏塔』(平川彰著作集第六卷『初期大乘と法華思想』春秋社、一九八九年)一九頁。